



紙ヒコーキが
飛んだ



kou

始まりのヒコーキ

太陽が真上に昇りかけたころ、中学二年の綾子は学校の屋上へ辿り着いた。そこには目当ての人物がいた。

「あっ！いた、いた。また授業サボって、もう給食の時間だよ、星矢！」

「ああ、もうそんな時間か」

目をこすりながら星矢は欠伸をした。

「ああ、じゃなくてさ。ちゃんと授業受けなよ。そもそも、なんで授業受けてないのに私より成績いいわけ？」

綾子は腹立たしい気持ちにさせられた。星矢は、学年トップの秀才である。だからといって、それを鼻にかけることもなく、どこか飄々としていて、やる気がない。だからか、他の先生達も、「星矢君なら、大丈夫だろ」と半ば楽観的な態度を崩さない。なにが大丈夫なのだろう？と綾子は思う。たしかに勉強も大事だけど、仲間との触れ合いも大事なのではないかと彼女は考えるが、それは勉強ができない、といういい訳にも聞こえる自分が歯がゆい。

「なにかいいなさいよ」綾子が応酬し、「給食冷めるわよ」と言い足した。

「綾ちゃん。勉強はほどほどでいいんだよ。僕は人を救いたいし、給食は冷める前に食べたい」

校庭を見つめていた星矢が綾子の方を向いて白い歯をこぼした。その笑顔に彼女は、なんといいかわからない気持ちにさせられた。

「言ってる意味がよくわからないんだけど、人を救いたいなら、お医者さんになればいいじゃない」綾子は早口で捲し立て、「まだ星矢の分の給食はよそってないから大丈夫」と言い足した。

「医者じゃ救えないところだよ。ここだよ」

星矢は自分の胸を人さし指で指した。太陽が星矢を照らし、仏のようだ、と綾子は思った。

「胸？」綾子が訊いた。

星矢は首を横に振り、「こころ」と、一語一語噛み締めるように穏やかな口調で言った。

「なにそれ？そもそもどうやって？医者でいいじゃない」

綾子は矢継ぎ早に責め立てた。上杉謙信の啄木鳥戦法を思い出した。ちょうど四限目が歴史の授業であり、学びを活かした、と綾子は満足げだった。それが伝わったのか、

「綾ちゃん、何でニヤニヤしてるの」と星矢に指摘され、綾子は頬が熱くなった。

「でね」と星矢が話題を変え、「そんな大それたことじゃないんだ。これだよ」

制服の内ポケットから、綺麗に折り目がついた紙ヒコーキを星矢は取出した。その紙ヒコーキは白色の折り紙を使用していたからか、太陽に反射しオレンジ色に光っていた。

拾ったヒコーキ

一月の冷たい風が吹いた。マフラーを強めに首元に巻き、早紀は家路へ急いだ。新卒で入社し今年で六年目。入社した当初は営業職だったが、成績がふるわず適正がなかったのかクレーム処理に回された。営業としての適正がないのに、クレーム処理などできるのだろうか？と訝ったが、なんてことはなかった。所定のマニュアルがあり電話での対応だった。スーツを綺麗に着こなし、朝から夜までバリバリと働く。そんな幻想を抱いていたが、思いのほか社会の壁は熱かった。それでいて今は私服勤務。

「私なんてこの程度、そんな言葉が早紀の脳裏にテロップとして流れる。

気づけば下を向いて歩いていた。道には小石があり、それをハイヒールで蹴った。勢いよく転がり、その勢いでハイヒールの踵が折れた。思わず、もお、とため息が漏れる。その怒りの矛先をどこに向けていいかわからず、うずくまりハイヒールの踵の部分を繋ぎ合わせようとする。当たり前だが、うまくはいなかった。人生もうまくはいかない。

早紀は空を見上げた。まん丸い齧りたくなるような月が辺りを照らしていた。そして今起きた一連の流れに涙が出そうになった。そんな感慨にふけていると一陣の風が吹いた。彼女は目を瞑り、再び開いた。すると、ゆらゆらと何かを弧を描くように飛んでいた。闇に映える白いものだ。

「紙ヒコーキ？、そう思うのは必然だったのかもしれない。早紀の視力は現代では珍しく2.0なのだから。

しばしその光景を眺め、目で追い、首に巻いたマフターを、早紀は少し緩めた。紙ヒコーキにしては長めの飛行だった。普通、紙ヒコーキというのは、上から下へあつという間に落ちる。が、この紙ヒコーキはなにかの意志を持っているみたいに、旋回し、そして早紀の足元に辿り着いた。

早紀は紙ヒコーキを手にとった。折り目がきっちりとつけられ、アイロン掛けした後のYシャツのようだった。

。

「綺麗で折り目がつけられ皺がない、

こんな紙ヒコーキははじめてだ。

早紀はあらゆる角度から紙ヒコーキを眺めた。作り方は知っているが、どういう経緯で紙ヒコーキが作られたのか、早紀は気になった。なので、折り目をやさしく、丹念に、慎重に戻していく。

すると、どうだろう。そこには丁寧な文字で、

『あなたを必要としてくれる人がいます。それに、下ばかり向いていたら虹は見えません』

と書かれていた。

私を必要？どうだか、早紀は皮肉を込めて鼻で笑った。

どこからか紙ヒコーキが飛んできたか、早紀は気になった。ぐるぐると辺りを見回し、一軒の家に灯りが点いていた。その二階に男の人影があった。早紀に気づいたらしく、男は律儀にもお辞儀をした。それは好感のもてる洗練された所作だった。

出会ったヒコーキ

早紀は駆けた。男の人影が見えた場所に到着した。それは家ではなかった。事務所？商店？その疑問はすぐに解決した。

『紙ヒコーキ』

と看板があったからだ。お店なのだろう。錆びれたシャッターが閉められている。

「すみません」と早紀は声を上げた。

返事はなかった。しかし、ガラガラとシャッターが上がった。手動でなく自動だった。どうやら細かい部分は洗練されているらしい。

「どうも」と男が言い、「星矢です」と名乗った。星矢が、寒いから中へどうぞ、と早紀を促した。彼の振る舞いは、あたかも早紀がこの場所へ来ることを予期してたかのようにスムーズだった。

「ここは、いったいなんのお店ですか？」

早紀が訊いた。店に入り、目の前にガラスのショーケースがあった。その上には様々な形をした紙ヒコーキが置いてあった。動物や何かのキャラクター、もちろん飛行機の形をしたものまで様々だった。

「見たまんまです。紙ヒコーキ屋です。でも少し違うのは、そこに僕自身が思ったメッセージを書かせてもらってます」

早紀は自分の紙ヒコーキを眺め、「私にも書かれてました」と言った。

「今のあなたにぴったりだと思います」と星矢は穏やかに言った。。

年齢は二十代半ばだろう、と早紀は思った。童顔で華奢だが、透き通る目が、より一層落ち着きを醸し出し、穏やかな物腰を演出している。

「そうですね？毎日クレーム、クレームで大変なんですよ。しつこいクレーム担当もいるし」と早紀の口から矢継ぎ早に言葉が飛び出、「しつこい？」と星矢が訊ねた。

「そうなんです。あまりにしつこくて、上司と一緒に、そのクレマーの家に何度も行ったんですよ。で、気持ち悪いのは、ずっと私の手を見ながら喋るんです」

早紀は、蠅を追い払う仕草をした。それを見て星矢が苦笑を漏らし、「その人は、あなたの別の一面を見ているのかもしれませんが」

どこか達観した口調で言った。

初対面なのに、ここまで話しやすい人は初めてということに、早紀は気づいた。

「そうでしょか」早紀は訊く。

「いずれ答えが提示される日が来るでしょう」四十代のような発言を星矢はした。

終わりのヒコーキ

星矢の言ったことは本当だった。後日、いつものクレマーの家に呼ばれた。しかし、玄関を開けた瞬間に謝られた。そのクレマー曰く、早紀の指がとても綺麗で、モデルをやって欲しいということだった。指をあらゆる角度から確認する為に、クレームのフリをしたらしい。指モデルは専属という雇用であり、その元クレマーはネイル雑誌の社長だった。

ふと、あの紙ヒコーキの文面が早紀の頭をよぎった。

『あなたを必要としてくれる人がいます。それに、下ばかり向いていたら虹は見えません』

早紀は一度深呼吸し、一歩前へ踏み出してみようと思った。

雨上がりの空には、虹が架かっていた。